

[138]語文研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/7393733>

出版情報：語文研究. 138, 2024-12-24. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



《会員著書紹介》

盛田帝子 編

『古典の再生 The Revival of the Classics』

本書は、二〇一三年二月十一・十二日に、京都産業大学むすびわざ館で、オンライン併用で開催された国際シンポジウム「古典の再生」におけるパネリストの発表、議論をもとに成った論集である。本書の構成は以下の通り。

- I 再生する古典
- II イメージとパフォーマンス
- III 源氏物語再生史
- IV 江戸文学のなかの古典
- V WEBでの古典再生

「I 再生する古典」では古典の再生を論理的・多角的に考察する。「II イメージとパフォーマンス」では、古典テキストをビジュアル化したものや、パフォーマンスとして表現したものに焦点を当てた。「III 源氏物語再生史」は、『源氏物語』が中世から近代にいたるまで、さまざまな形で立ち現れる様相を論じる。「IV 江戸文学の中の古典」は、江戸時代における古典再生の事例を多角的に取り上げている。「V WEBでの古典

再生」について、「古典本文をWEBに載せる」は、TEIの概説に加え、デジタル時代の古典本文の翻刻とその公開方法についての提唱を行う。以下、学会会員である盛田帝子氏と飯田洋一氏による章段を少し詳しく見ていきたい。

盛田氏によるII 2「十八・十九世紀における王朝文学空間の再興」は、寛政度復古内裏での、古記録・古典の再創造について述べる。光格天皇と朝廷は、平安内裏に由緒をもつ紫宸殿・清涼殿を再建した。並行して、殿舎の中の襖絵などの障壁画や、和歌、音楽が生まれる御常御殿の御小座敷という空間が造られている。その際、古記録や古典（文学・絵画作品）が用いられ、資料がない場合は、天皇の好みを踏まえ、当代に即して新規に考案された。当時の江戸や京都では、古典を用いた王朝復古を目指しつつ、古典を活かし、時代に即した新たな文化を取り入れた空間の再創造がなされていたのである。

飯田氏によるIV 14「上田秋成における〈古典〉語り」は、『春雨物語』『歌のほまれ』の〈古典〉語りの様相が「テキスト遺産」に相当すると主張する。『万葉集』の注釈を逸脱した「長物がたり」は、秋成の万葉研究書『金砂』や『春雨物語』にも見られる。両者のジャンルは異なるが、〈古典〉語りの面から見ると、非常に近いテキストで、かつ既存のジャンルに収まらない散文であり、「古典の再生」の現れだといえる。

シンポジウムをもとに成立した本著は、古典の持つポテン

シヤルが未来を創造する可能性に満ちていることを感じさせるものである。

(令和六年三月 文学通信 A5版 四四七頁 二、八〇〇円＋税)

盛田帝子・ロバート・ヒューイ 編

盛田帝子・松本大・飯倉洋一 校注・訳

『江戸の王朝文化復興―ホノルル美術館所蔵
レイン文庫『十番虫合絵巻』を読む―』

本書は、ホノルル美術館が所蔵する『十番虫合絵巻』に関する精密な解説と、研究者たちによる多角的な視点からの論考を記したものである。本書の構成は以下の通り（各章段については割愛した）。

はじめに

I 本文と解説

II 論考・コラム

III 付録

十八世紀後半の日本では復古主義が流行し、光格天皇による朝儀や神事の復古、田安宗武による「梅合」の再興などを

はじめとして、政治・文化の両面で王朝時代の復興が盛んに行われた。王朝文化への憧れを抱いた人々によってさまざまな物合が再興される中、都に思いを馳せた歌として有名な「名にし負はばいざ言問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと」（『伊勢物語』第九段）が詠まれた隅田川で再興したのが、「十番虫合」である。

本書で紹介されるホノルル美術館所蔵『十番虫合絵巻』は、天明二年（一七八二年）に開催された「十番虫合」に出座していた三島景雄が記録・編集した絵巻物である。人々が左右に分かれて、それぞれが鈴虫あるいは松虫を用いた飾り台と和歌を出し合い、その優劣を十回にわたって競い合う様子が記録されている。和歌と判詞に加えて、実際に使われた飾り台の様子が色彩豊かで繊細な描写により記録されており、娯楽と学問や美術が結びついた高度な遊びと当時の美意識が反映されている。

第I章では、『十番虫合絵巻』の影印・挿絵をカラー画像で紹介し、校訂本文・現代語訳・注釈とともに、作り物（飾り台）の趣向や読みのポイントも併せて紹介している。原典に忠実な形で絵巻を理解するための基礎が提供されており、当時の文化的・歴史的な時代背景とともに知識人たちの交流や思想を読み解くことができる内容になっている。第II章では、第I章で紹介された内容をもとにして『十番虫合絵巻』をさまざまな視点から読み解く論考・コラムが収録されている。

第三章の付録では人物解題・翻刻・本文校異など、第一章の補足的内容が記され、本書末に収録される英語版の内容へと切り替わっている。

江戸時代の文化を深く掘り下げるとともに、原典をもとにした多角的な分析が行われている本書は、文学や美術、文化史など数多くの分野の研究者にとって重要な文献となっている。

(令和六年四月 文学通信 A5判 三八四頁 二、八〇〇円＋税)

若木太一 著

『近世長崎渡来人文運史』 ——言語接触と文化交流の諸相——

最初に目次を掲げる(各章題は省略)。

前言

第一部 海峡渡航者と日本

第二部 明清交代と長崎

第三部 渡来人の系譜

第四部 長崎聖堂とその周辺

あとがき

初出一覧

以下、それぞれの章を要約しつつ、各部の内容を略述する。

第一部では藤原惺窩・石川丈山・雨森芳洲について、「海峡渡航者」が彼らに及ぼした影響の大きさが明らかにされる。第一章は、惺窩の前半生を、朝鮮・明の使者との邂逅、慶長の役で朝鮮から日本へ連行された姜沆との交流に重点を置いて述べる。第二章では、丈山の詩名を高めた権伏との筆談について述べられ、第三章では筆談原翰(静嘉堂文庫蔵)の翻刻が提供される。第四章は芳洲の唐話の師、國思靖こと上野玄貞の伝記考証、第五章は芳洲の著した朝鮮語学書『交隣須知』の成立過程を、同時期に朝鮮で編まれた日本語学書『倭語類解』との関係に触れながら述べる。

次に第二部。東アジア規模の動乱の中、長崎に行き着いた明人の関わった文事を紹介する。第一章は日本渡航前後の隠元隆琦の事跡を、第二章は鐵心道胖による聖福寺開創を祝い、寄せられた聖福八景詩を、第三章は近世前期の長崎奉行・牛込忠左衛門の周辺にいた明の遺民たちを、第四章は『彦山勝景詩集』に詩文を寄せた黄檗僧・唐通事たちを、それぞれ取り上げる。

第三部の主役は唐通事である。様々な出自をもつ彼らはなぜ長崎へ至り、異国の地でみずからの立場を築いていたのか。第一章は元唐通事・頼川君平の『訳司統譜』を中心に、

唐通事の制度変遷、および歴代の唐通事のうち主だった人物の略伝を述べる。第二章・第三章は牛込忠左衛門と雅交を結んだ唐通事の林道栄と劉宣義の伝記考証、第四章は、通事の職を辞して京都に移り住んだ劉図南こと彭城儀藤太について、彼が京都で著した小説『烈婦匕首』と、長崎で彼の妻が起こした密通事件の関係を指摘する。第五章は、東京通詞を世襲した魏家の出自と代々の事跡を述べる。第六章は、篠崎東海『朝野雜記』に出る享保元（一七一六）年の唐話會記録を全文翻刻してその模様を紹介、さらには近代の通事たちの動向にも触れる。第七章は「唐通事由來書」（長崎県立図書館蔵）の翻刻紹介である。

第四部の「長崎聖堂」は長崎における儒学の拠点であり、第一章・第二章で取り上げられる向井元升を創設者とする。五十歳の時、元升は天神の夢告によって京都へ移住したが、第一章はその背景として、先祖以来の神道との関わりと、元升の抱く黄檗への嫌悪感を指摘する。第二章は現在知られる元升の著作の解題である。第三章では家祖・盧君玉から草拙・千里親子に至る代々の当主の伝記を考証する。第四章は宝永・正徳期における玄岱の事跡をまとめ、第五・六章は新出の玄岱自筆史料を翻刻紹介する。第七章は荻生徂徠一門との交流が確認される古文辞派の詩人で黄檗僧・大潮元皓の伝記考証と年譜、第八章は大潮晩年の作品を収めた詩文集『瓊浦遊草』から、長崎での唐通事たちとの雅交の様相を明らかにする。

第九章は大潮の弟子・高階暘谷の伝記考証と遺された作品を紹介する。

以上のように、本書は長崎という場を中心として、多様な出自をもちつつも日本へ移り住み、異国の社会に溶け込んでいった人々の動きと、彼らが近世日本の学芸に及ぼした影響の諸相を提示する。

著者は記録・文書・詩文・書跡といった多種多様な史料を読み込んでおり、中国や朝鮮の文献にも言及されている。その膨大な情報量からの学びは多い。特に人物情報は豊富で、各章の主要人物には年譜が、その他の人物の多くに略伝が付され、『近世長崎学芸人名事典』とでも称したくなる。著者の費やした労力と時間に、感謝と畏敬の念を抱かざるを得ない。また、石川丈山の隠遁生活と三河武士としての出自の関係や、向井元升の積極的に西洋自然科学を摂取する姿勢など、近世の学芸史全体に対する重要な指摘もなされている。広く近世東アジアの文化史全体にとって、貴重な研究成果と言える。

（令和六年六月 勉誠社 A5版 七〇四頁 一三、〇〇〇円＋税）

川平敏文 著

『武士の道徳学——徳川吉宗と室鳩巢』
『雑話』——

本書は、十八世紀初頭に徳川吉宗に仕えた朱子学者・室鳩巢の生涯と思想を、彼の代表作である『駿台雑話』及び書簡資料を通して、考察したものである。本書の構成は以下の通り（節題などは割愛した）。

凡例

序章 鳩巢、江戸へ——不遇意識のゆくえ

第一章 幕儒としての日々

第二章 庶民教化の時代

第三章 『駿台雑話』の成立

第四章 異学との闘い

第五章 武士を生きたる

第六章 文学とは何か

終章 後代への影響——『駿台雑話』の受容史

あとがき

参考年表

書名索引・人名索引

室鳩巢（一六五八—一七三四）、名は直清。木下順庵に学

び、朱子学を信奉する。五四歳まで加賀藩儒として前田綱紀に仕えていたが、正徳元年（一七一二）に新井白石の推挙により、幕儒として拔擢された。のち、徳川吉宗に仕え、「享保の改革」の相談役として活躍していた。著作には『六論衍義大意』、『駿台雑話』（以下『大意』『雑話』）などがある。また、彼の書簡集（自筆本『兼山麗澤秘策』、『可観小説』など）は、鳩巢の人物像を知るための貴重な資料である。本書の大きな特色は、「生の声」が収録された書簡資料を使って、多角的に鳩巢を描き出している点にある。

序章では、鳩巢の加賀藩儒時代の人生を概観している。彼の書簡と漢詩作品に現れる「不遇意識」を、山本嘉孝らの研究を踏まえつつ指摘している。

第一章では、幕儒としての鳩巢の仕事が紹介される。彼の主要な職務の一つである「講釈」を公開講釈と御前講釈に分けて、その実態を考察している。

第二章では、吉宗の命令により編述された『大意』の成立背景と編述過程が詳述される。『大意』の成立と吉宗の教化政策・東アジア研究との関連性について論じている。また、『大意』の編述をめぐる吉宗と鳩巢の綱引きが本章の見所である。

第三章から第六章までは、鳩巢の学問の集大成である『雑話』を中心に論じたものである。第三章では、幕府の文教政策に一役買っただけという鳩巢の執筆動機と、『雑話』が随筆と談義本の性格を併せ持つことが指摘される。

第四章では、『雑話』における思想的問題を取り上げてい

る。朱子学を正学とし、異学との戦いを自らの天命と考える鳩巢の姿勢を明らかにした上で、『雑話』に見られる異学に対する厳しい評論を詳細に分析している。さらに、書簡資料における諸学派の儒者に対する評判を通じて、鳩巢の学問観や人物観についても論じている。

第五章では、『雑話』における武家説話を取り上げている。徳川家康や幕府創業期の武士たちの逸話を通じて、鳩巢の理想的君主像（去私・納諫・摂官）・家臣像（忠義・諫言・人情）について考察している。

第六章では、『雑話』における文学観を取り上げている。詩歌においては、宋代詩論が「風雅詩観」の形成に影響を与えたと指摘している。文章においては、道徳を根本におく文章論を明らかにしている。

最後に終章は、『雑話』を中心とした鳩巢の著作が後世に対する影響について論じたものである。

以上のことから、本書は、鳩巢に対する理解を深めるために、非常に価値がある一冊であり、さらに、江戸時代の思想、歴史、文学を探求するためにも極めて貴重な資料であると言える。

（令和六年六月 KADOKAWA 四六判 三〇〇頁 一、九八〇円＋税）

菱岡憲司 著

『その悩み、古典が解決します。』

本書は、現代人の悩みを江戸時代の古典から意見を取り上げ、回答するという人生相談本である。近年に見られた古典教育の必要性議論に対し、教育や教養の視点ではなく、現代の日常生活で直面する悩みを解決するという実用的な角度から、古典の有用性を唱えた。また、学校の国文教育による古典への抵抗感を減らすため、本書の素材はすべて、学校の教材としてほとんど扱われていなかった江戸時代の古典を採用している。

本書は三十章の構成であり、それぞれに三十個の悩みを取り上げている。「1… たったひとつの選択肢が世界を変える——井原西鶴『西鶴諸国ばなし』」のように、毎章一つの悩みに対して、一作、あるいは二作の作品を説明し、その解決策を示す形で展開していく。目次については省略し、以下数章をとりあげ、紹介を行う。

例えば、「色々とやりたいことがあつて困ります（四章）」や「集中力がありません（五章）」など学生にとつてありふれた問題に対して、「禁中并公家諸法度」をあげながら、とりあえず後水尾天皇のように三年間と時期を区切ってやりたいことをすべてやってみること、そして、本居宣長の『排蘆小船』を引用し、集中できなくてもよいから、やるべきことへの意

識を手放さないようにしようと説明している。また、「文学を勉強するって、なんの役に立つのですか? (二十一章)」のような国文教育や文学研究の根本に触れる問題もあり、それに対して著者は、文学とは本居宣長が『紫文要領』で語ったように、人の心の動きから自然と生まれたものであり、いわゆる「もののあわれ」であり、そうした人情の機微を知ることこそが、人間としての成長につながると述べている。

総じて、本書はこのように多様な質問を幅広く収集し、それぞれにユーモアを交え、説教臭くない答えを返している。西鶴、近松、馬琴といったメジャーな作家の作品もあれば、本草書や漂流記などもあり、ジャンルを問わずマイナーな古典も数多く網羅している。素人でも初心者でも手に取りやすい一冊だと考えられる。

(令和六年七月 晶文社 四六判 二四八頁 一、七〇〇円＋税)